はじめに

これは、日本語教育に携わる方々に向けて作成した研修用マンガ教材です。普段の授業や学習者との日常的なやりとりについて振り返るきっかけとなればと考えて作りました。

いわゆる地域の日本語教室における六つのエピソードをマンガで紹介し、それについてのタスクと解説を設けています。エピソードはいずれも二〇一三年から二〇一五年にかけて、国内各地の日本語教室で撮影させていただいた授業をもとにしています。架空の話というわけではありませんが、どこか特定の教室で起こった一回限りのことというわけでもありません。複数の場で共通して起こっていることを集約し、エピソードにまとめマンガにしました。ここに描かれているのは、通常の教室でよく起こっていることですが、もしかしたら、気が付かないまま、過ごしてきたことかもしれません。そのため、各話のマンガを読んで、私も同じことをしていると思い至る方、こういう風景をたしかに見たことがあると言う方、学習者としてのご自身の経験を思い出す方など、いろいろな方がいらっしゃるのではないかと思います。

私たちは日本国内の五つの地域で十一の団体にご協力いただき、二十二の教室において全部で九十八の授業を撮影させていただきました。「地域の日本語教室」と呼ばれるところにビデオカメラを持ってお邪魔したのです。これらの教室は、一対一、少人数のグループ、一斉授業等、異なる形態で活動が行われており、授業の長さや内容も様々でした。また、「教室」の場所も学校、公民館、中国料理店などです。当然、黒板

や教卓のような、学校の教室で見かけるものがないところもあり、さらには「日本語活動」であり「授業」ではないというところもありましたが、ここでは便宜的に「授業」という呼び方をしています。

撮影後、映像資料や文字化資料を、複数の観点、異なる手法で分析しました。その分析結果を見ていくと様々な傾向が浮かび上がり、課題と思われることも明らかになってきました。そして、その傾向や課題は地域の日本語教室に限らず、他の日本語教育の現場にも共通するものではないかと考えるに至りました。そして、それを多くの方と共有し、その傾向の意味を検討したり、もし改善が必要な事柄ならば、その原因を探ったり、改善策を考えたりするためにはどういう方法で研修を行えばいいのか考えました。

撮影した映像そのものを用いること、研究論文を読んでもらうこと、文字化資料を用いること、再現ビデオを作ること、などを考えましたが、教室の中で起こっていることをなるべくわかりやすく伝え、振り返りのためのきっかけ、意見交換の素材とするには、「マンガ」がいいのではないかというアイディアが生まれました。実際に起こっていることを過不足なく描き出すことができるのはマンガだと考えたのです。

マンガを使った研修がうまくいくかどうかはまだわかりません。この本をぜひ多くの方に手に取っていただき、まずは実際にお使いいただけたらと思います。そして、お使いくださった方々の間でどのようなやりとりが生まれたか、何がうまくいかなかったか、どこがおもしろかったかなど、教えていただけたらと思います。実際の使用結果を踏まえて、教材としての改善を加え、また、エピソードを追加していく計画です。

この本の元となった研究及びこの本の作成に関わった人たちを紹介します（敬称略）。各話とタスク及び解説を担当したのは、森篤嗣（第1話）、岩田一成（第2話）、文野峯子（第3話及び第5話）、杜長俊（第4話）、金田智子（第6話）です。マンガは中沢朋（学習院大学文学部日本語日本文学科卒業生）が描きました。また、この本の元となった授業の撮影から分析、マンガの試用に至る各段階において、佐々木倫子、茂木真理、吉田聖子、宇佐美洋、中上亜樹、須賀和香子、黒瀬桂子が関わっています。編集補助は地引愛が行いました。そして、この本はＪＳＰＳ科学研究費基盤研究（Ｂ）「『生活のための日本語』の授業実践に関する研究：研修システムの構築をめざして」（課題番号２４３２００９８）及び学習院大学人文科学研究所共同プロジェクトの成果の一部です。

最後になりましたが、撮影を許可してくださった各教室の皆様にあらためてお礼を申し上げます。

本当にありがとうございました。

二〇一七年三月

代表　金田智子